
暇な魔王の一日 午後

ziFuka

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暇な魔王の一日 午後

【Zマーク】

Z8003Z

【作者名】

z-iFuka

【あらすじ】

二人の姫に制裁を加えたレオン。
裏で暗躍する何者かの影。

暇な魔王の日々がついに終わる！

(『暇な魔王の一日 午前』を先に読むことを強く推奨します)

(前書き)

あらすじにも書いてあるとおり、先に『暇な魔王の一田 午前』を読まないとキャラクターの説明などがされませんので、『了承ください。

再構成したときに生じた分を分けたものです。午前よりもだんだんとシリアスになっていきますので、違った面白さを感じてください。

勇者と魔王。

人間たちの味方、人々の救世主、闇を打ち倒し世界に光をもたらす者。それが勇者。対して魔王は人間たちの敵、魔族の頂点に君臨する者、世を混沌へと落とす者。

古い御伽噺やファンタジーの小説では必ず争つ二人で

「…………」

「あ…………！」

「…………」

「…………」

「…………なあ、お前」

「な、なんでじょうか魔王様…………？」

「俺が何を言いたいか分かるか？」

「…………はい」

「確かお前、前にも同じようなことでぶつ飛ばされてたよな？」

「……はい」

「俺の記憶じゅ、お前は星になつて戻つて来なかつたと思つんだが？」

「その……先ほゞ戻つて参りました」

「ほうへ。 ビリまで行つて帰つてきたんだ？」

「ミルト村近くの森まで飛びました」

「で、数時間で帰つてきたと？」

「とても大変でしたが……駄目ですか？」

「徒步で数ヶ月もかかるのに、お前は数時間で帰つてきたのか」

「はい……」

「ふむ、そこは褒めるとしてだ。話を戻そつか」

「できれば戻さないで欲しいです……」

「何か言つたか？」

「いえ……何でもあつません」

「では聞ひづ。……今何をしていた？」

「……前回は私愛用の書に抱負を書き込んで飛ばされたので、今回は書ではなくメモ帳にしてみました。それから仕事は私には丁度無かったので、魔王様がおっしゃった個人的趣味に走つてもサボリにはならないはずです」

「すいぶんと今回は威勢が良いじゃねえか。ならそりに立てかけられてこりはたきと籌は何だ?」

「それはお柰へメイド達が忘れていた物だと思います」

「ではあそこの本が散乱している机は何だ?」

「……あれはお柰へヘルナ姫様があそこで本を読んでいたのだとと思ひます」

「だつたら何で机の引き出しや近くの本棚まで荒らわねてこるんだ?」

「…………ルナ姫様が何かを探していたのでしょうか」

「じゃあ……これは何だ?」

「それは私のー?」

「ああ。お前が愛用していた書だ。そしてお前が日々この部屋に隠していたのもこの書だよな?」

「な、なぜそれをー?」

「お前は城に戻つてから仕事の続きをしていくふつをし、この部

屋へ向かつた。そして部屋に入ると一冊散にこの書を探した。なぜならお前がぶつ飛ばされたときには普段隠しているこの書が机の上に出しつぱなしなくなっていたからだ。

こつもなら他のメイドや執事が隠してくれているだらうと信じ、あの本棚の一冊田の真ん中、緑色の偽装カバーを付けた本を探したが無かつた。焦つたお前は本棚の本をあらかた出し、机の引き出しやタンスを探し回り、そのメモ帳を見つけた。

おそらく自分の考えた“抱負”を忘れないうちに書きたかつたのか、それとも単に衝動に駆られたのかは知らないが、お前は書の代わりにメモ帳に綴るうとした。そして俺が来たからもう開き直つて上手い言い訳をしようと考えていたんだろう？ 最初の沈黙で

「…………」

「お前は本来なら東の一階、ベランダにいるはずだ。なのになんで西の一階のここにいる？」

「そ、それは……」

「いい加減白状したらどうだ？ 極北の酷寒山脈まで飛ばされたくないだろ？？」

「…………」

「お前のことなど全てお見通しだ」

「……参りました。申し訳ありません魔王様」

「どうに飛ばされたい？」

「……サボつても蹴飛ばされない所が良いです」

卷之三

卷之三

「……もういい出直して来いやああああああああああつ！！」

「私は何度もサボってましたからね。」

「ふざけんな」の野郎があーー！」

その夜、地方では夜空に流れる赤い流れ星が観測され、話題となつた。

ただいまの記録一、5472kmでしたー。

魔王城。

そこは魔族の王が暮らす悪の居城。
とある一室でそれは行われていた。

「我等が主、今宵の作戦は準備万端なのですか？」
「ああ。先ほど連絡が回つてきた。遂に我等の時代がやつてくる
のだ」

「ですがよろしくので？　あの魔王様にたてついて無事に済むは
ずがないのです？」

「平氣だ。ちゃんと策を練つてあるから安心しろ」

「それなら安心です」

「では皆の者……解散。我等が主に勝利を」

『我等に勝利を――』

声を抑えて敬礼をし、続々と部屋から立ち去つていぐのを見て、
彼は今後の計画を頭に浮かべる。

「計画に支障をきたさない程度に私からも一手を打つておきます

か……」

暗闇の中、蠟燭を片手に巻き角の青年は笑みを浮かべた。

所変わつてここは城の食堂。

端から端まで何メートルもありそうな広さの食堂で、レオンたちは一角に座つていた。

レオンは一番端の一人席で、4人のお姫様達はレオンから少々距離を置いて座つている。

いつもなら1・2席分しか離れないのだが、数時間前のこともあり5席分くらいの距離があつた。

テーブルには数々の料理が並んでおり、豪華な食事となつているのだが……

「……なあ、バトラー」

「何でしようか?」

「なんで俺の所だけ料理が無いんだ?」

レオンの前にあったのはいくつつかの食器のみ。

向こうへと目を向ければちゃんとお姫様達の前には料理が並べられている。

数時間前に骸骨の溢れる地下牢獄へ連れて行かれ、ハートブレイクを起こしたのにも関わらず、いつものように食事をしているアローネにはさすがのレオンも驚いたが。

レオンの問いにバトラーは淡々と答える。

「今日は趣向を変えまして、コース料理にしたのです。ほら、前菜が来ましたよ」

「これは……」

レオンの前に運ばれてきたのはカラフルな野菜が入ったピラフのようなものだつた。しかし野菜の一つ一つの色がとても鮮烈で、目が痛くなつてくる。料理の裏の何かを察知するようにレオンが顔をしかめる。

「お前……この野菜は食用なのか？」

「ええ。ビビッドベジタブルのピラフにござります」

「俺の記憶が正しければ……確かにそれは花火に使われる色つきの火薬じゃなかつたか？」

ビビッドベジタブルとは、名前のとおり強烈な色の野菜のことで、乾燥させて粉末にすると発火性を持ち、もともとの色の炎を上げるという不思議な植物である。形はトマトのように丸く、その色は赤や青など、少なくとも食欲をそそる色ではない。

料理を見ていたルナ姫とチル姫が怪訝な顔をする。

「いいえ。乾燥させなければ食べれるのです。それにこのビビッドベジタブルは庭で栽培していた物ですよ？」

「おいおい、それってまさかとは思つが部下が栽培していた花火用のやつじゃないのか？」

「違いますよ。庭の発火草の隣に植えていたものです」

「それだよ……」

レオンが怒ると、バトラーは渋々料理を下げるが、メイドに命じる。

「別に食べても平気ですと申し上げましたのに……」

「……食べるとき酸と反応して燃えるって本に書いてあった」「え？！？」

「せめてまともなのを出せよ……」

「ではこれならいかがでしょうか。ブルーメサラダ」「なぜこまか」「違う前菜じゃなこのな……」

次に出されたのは皿に花や葉の入った普通のサラダだった。色も先ほどのように強烈ではない。

「やつと普通のが……つて」

「どうなさいました魔王様？」

レオンは近くにあつたフォークを取り、サラダの葉をざけしていく。そして何かを見つけるとおもむりにそれをつまみあげる。

「……バトラー、これは何だ」

レオンがつまんでいたのは数ミリ程の葉についた紫の色。バトラーは表情一つ変えることなく答える。

「成長途中で色が付いてしまったのでしょうか。毒味もさせましたので平氣です」

「……なら平氣か」

つまんでいた葉をそのまま口の中へと放り込み、レオンはサラダを食べ始めた。

それを見てバトラーは微笑を浮かべる。

「……どうかしたのか？」

「いえ、何でもありません。お口に呑みこむまで安心したのです」

「そうかい」

そういひじてこむ内にレオンはサラダを完食し、メイドに目を下げさせる。

そのレオンの平常ぶつにバトラーが少し顎を動かす。

「あの……魔王様？」

「ん？ 何だ？」

「その、何ともないのですか？」

「何が？」

「いえ、何でも『わざとません。忘れてください』

「？」

「……ライアーリーフ、食用のブルーメリーフと非常に似ていて
紫の一点が特徴。食べると最悪死んじゃう」

「……チルちゃん」

「はい……ミコムさん」

「……聞かなかつたことにしておこう

「そうですね……」

「なあ、いつになつたら何の疑問も持たずに普通の食事ができる
んだ？」

「ただ何も考えずに食べるのが良いかと」

「途中絶対に食べれないものがあったのにか？」

「いいえ。あれは確かに食べられるものでした

「金属だったのにか！？」

「金属ではありません。イートメタルです」

「メタル（金属）じゃねえか！」

「eat（食べる）メタルです」

「ナイフで切れなかつたぞ！」

「そのまま食べるのです」

「もういい……」

と以上のよつなことが途中で起つ、レオンは食堂を後にしました。

幾度もミリム姫、チル姫は食欲の失せるよつな衝撃を受けたためにあまり食べず、恐ろしいことをぽつぽつと言つたルナ姫とまったく気にするそぶりもみせずただ田の前の食事に専念していたアローネ姫はいつもどおりの食事を終えていた。

その後チル姫とミリム姫はお互いを見て、

「……チルちゃん」

「何ですか……」

「とんでもない毎食だったわね……」

「そうですね……」

『はあ……』

同時にため息を漏らした。

これ以降チル姫とミリム姫は気にしないように心がめることを田指したらしく。

波乱の昼食の後、いつものようにレオンが勇者の相手をしたり、アロー・ネ姫が罠を仕掛けているところを発見されて鬼ごっこになつたり、ルナ姫は相変わらず図書室にこもつていたり、ミリム姫とチル姫が気分転換に散歩をしていたりと時は流れ、夜になる。王座の間ではレオンが玉座に気だるそうに座つてあり、またやつて来た勇者の相手をしていた。

「…………はあ。暇だ。暇すぎる」

「死刻ム爪ええええつー！」

「ダークネスボルトおーーー！」

「滅びの火炎つーーー！」

「よつこよつて何で勇者のクセにこんな黒いのが来るかね？」

「ふせつ、なり。

「私は理性を捨て、狂氣の鬼と化す。契約を捧げ、我に力をつ！これでも喰らいなああああああああ！」

「弱いくせに強くなあーー！」

卷之三

「なつ、ここの間に……！？」

「サイモン！？」
「ロビン！？」
「わつ来るなあ――！」

「だつたら最初から来るんじゃねええええええ……」
「ぎや——————！」

「はあ……ため息しかでない

「お勤めご苦労様です魔王様

「ああ……バトラーか。いつものように頼む」

「分かつてしますよ」

戦闘が終わったのを見計らつてバトラーがやつてくる。そして毎度のようにお決まりの魔法を使い、倒れている3人を遠くへ飛ばす。レオンはまた玉座へと戻り、肘をついてだるそうに前の扉を見る。ちょうど扉はさつきの三人が入ってきたことにより開き、城の前の森と夜空が広がっていた。

「やけに今日は弱いのばかりたくさん来やがったな……」

「そりでしようか？　いつも通りにしか私には見えませんでした
が」

「そりか……？　俺の気のせいが？」

「はい」

「…………といひでバトラー、最近の人間どもの動きはびつくなつてん
だ？」

「まだ戦争が長引いておりますよ。なんでもそれに巻き込まれた

魔王もいるみたいですね」

人間界にいる魔王はレオンだけではない。他にもピンきりの魔王が存在し、それぞれが城を構えている。

かつて人間界では勇者VS魔王の構造で成り立ち、世界が動いていたのだが最近では国同士の戦争にもなつていた。

そのため魔王の城が戦火に巻き込まれたりすることもしばしばつたのである。

……これが原因で弱い勇者ばかり来るのは余談だ。

「まだやつてんのかよ。なんなら、俺が介入してだな……」

「駄目です」

「ちつ。いいじゃねえかよ別に」

「何度も言つよつすがあなたは魔王なんですよ？　この城にいてもらわないと困ります」

「なんでだよ。勇者が来たら部下に戦わせりやいいじゃねえか。そもそもいきなり魔王との対決なんて道理に反するつてもんじゃねえの？　何にしても手順つてものがあるじゃねえか」

「そんな道理はありませんし、そつしたら今度は魔王様が城に居なくなるではないですか」

「俺が不在の時のためにお前じゃないのか？」

「違います。私はただの執事長であり、魔王様を非戦闘の面で補佐するだけです」

「お前戦えるだろ」

「魔王様には遠く及びません」

「一人でうちの兵士1000人倒して一騎当千したくせにか?」

「まぐれです」

「なんだよまつたく……あつ」

流れのような会話の後、レオンが何かを思いついたような仕草をする。バトラーは次の台詞を期待しているかのような笑みを浮かべる。

近くにいた魔王の部下達にも緊張が走る。そしてレオンが発した言葉は、

「お前が魔王になれば良いのか」

バトラーの期待通りの言葉だった。

「そうだよ。お前を魔王にしてしまえば親父みたいに俺もこんなことしなくて良いもんな。うん、それがいい」

「いえ、私には魔王になる資格など……」

途端にバトラーの言葉に嘘くせもが混じり始める。だがレオンは気づいていない。

「いや、あることはあるが?」「魔王の命令は絶対”って昔あの糞

親父が言つてた気がするしな

「ですが“魔王の血族に次期魔王の座は渡される”のです？」

「……俺の言ひどいが聞けないのか？」

「いえ……くへつ

バトラーが思わず笑い声を出してしまつ。それに待機していた部下達にもまた緊張が走る。王座の間の外では張り詰めた空気が流れ、今か今かとその時を待つ。

「なんだよ急に、気持ち悪いな

「すみません。思わず……」

「では今日からお前を魔王に任命しむ

「…………」

「後はよろしく頼むや。……やつといふやつはもうなつて日常から抜け出せる

「その時が、来た。

バトラーは今までに見せたことの無いような笑みを浮かべ、けのびをするレオンの方を見て一言。

「……その言葉を待っていましたよ

「は？今おまえ何で……」

バトラーは高々に手を仰ぎ、指揮官のよひに命令を下す。計画の成功を告げる命令を。

「総員一配置につけ！今こそ下克上を果たすのだつ……」

『おおーーーーーーーー』

「まあはそいつを追い出せ……！」

待ち構えていた部下達がぞろぞろと扉から現れ、バトラーの後ろに横一列の隊列を作り上げる。そして手に持った多種多様の獲物をレオンの方へと向ける。それが意味するものはつまり、

「へえ～

謀反である。

「面白っこいとこしててくれるじゃねえか。バトラー？」

「ええ。朝から計略を巡らしたかいがありましたよ。元・魔王様？」

バトラーは見下したような表情でレオンと対峙する。手の上で踊らされていたにも関わらず、レオンはどこか嬉しそうである。

「いい度胸じゃねえか。よつするに最近の退屈なのはお前が原因だつた訳だ」

「……それは知りませんが、まあ結果的に良いものになつたのなら私が原因でも構いませんよ。ですがあなたは逆らえないはずです。“魔王の命令は絶対”なのですからねえ？」

「ははっ。良いねえ。だが俺がこんな楽しいことをすぐには終わらせるとでも？」

「何をするつもりですか？ どうりであなたには何もできませんよ」

レオンとバトリーの言葉の応酬がなにやら険悪なものになつていくにつれ、士気の良かつた部下達の背筋が凍つっていく。

「お前への対応はこの謀略に免じてキャラにしてやる。だがお前ら、俺にたてついたうどつなるんだっけなあ？」

『ひつ！？』

レオンは不敵な笑みを浮かべて部下達の方を見つめる。その狂氣じみた何かを感じた部下たちが逃げ出そうと引け腰になつり、武器を向ける手を震わせ始める。

「ううたえるなっ！ 隊列を乱すんじゃない！？」

『は、はいっ！』

だんだんと地響きが鳴り始め、周りの石柱等が浮き始める。

「……一度城を出て行つてやる。準備、しつけよ？」

レオンは一警すると、正面の大きな扉に向かっていき、ゆっくりと扉を開けていく。

この空間に敷き詰められた威圧感、プレッシャーのせいか景色がスローモーションに見える。

部下達にはその動作の一つ一つが気が気がでなかつた。

「さらばだ。そして次に俺がここに来る時は……」

扉が開け放たれ、そこから見える白い背景とともにレオンがだんだんとこちらへ顔を向けていく。

その顔に映るものがどんなものか、部下達には非常に怖かつた。バトラーだけはただ一人、まっすぐに裏切った主へ目を向ける。

「……地獄にしてやるからな？」

『ひいつー？』

レオンのその一言と共に、扉から強大な殺氣が突風のよつに吹き荒れ、部下達に吹き抜ける。

一瞬にして士気が無くなり、全員腰を抜かしてその場にへたりこんでしまう。

部下達が見たレオンの表情は……、

セイゼイ楽シマセロコ？ ブツ潰シテヤルカラ。一人残ラズナア！

レオンは振り返り、壁の向こうへ歩こんでいく。
高笑いを上げながら、あいつ、あいつとの一歩一歩を踏み
しめるよつ。△

扉が独りでに閉まっていき、ドタンといつ重苦しい響きと共に、あの高笑いがその場に残る。

部下達はその時思つた。

こんな事するんじゃなかつたと。

強く、強く後悔した。

バトラーさえも顔をしかめて今後の準備に悩み始める。

元・魔王レオン・ド・ザインは、自らを裏切った部下達と執事長に、

破滅という名の絶望を与え、自分の城を後にした。

こうして、暇な魔王の一日は、終わった。

(後書き)

～樂屋裏にて～

「ああ～やつと終わったな」

「えうですね。西脇さん」「苦勞様です」

「私はちゅうじゅ出番がほとんどないんだけどー？」

「…………」

「私とチルちゃんはあまり良い役ではなかつたけれど、出番はあつたわよー。」

「えうですね」

「再構成前の話なんて一日ですまなかつたしな」

「あれは統一感もなくて無駄にグロいところもありましたからね」

「まあ、少しあはマシになつたんじゃねえの？」

「まあ、私の活躍つぶりもあつたから良じとこよー」

「結果的に暴走しただけだと俺は悪いぜ？」

「それでもあのせつちゅけつぶりは楽しかったよー。……怒られぬまでは」

「自業自得ね」

「そりですよ。私なんてほとんどまひあつみたいなものでしたよ？」

「……私は逃げれた」

「でも皆さん全員にスポットライトは当たったんじゃないですか？」

「言われてみればそうだな」

「前の人たちもチョイ役でいましたからね」

「結果オーライでしょー！」

「それじゃ、これを読んでくれた皆さんに感謝しましょう！」

『……え？』

「……え？」

「感謝なんて必要あんのか？」

「で、でも一応した方が……」

「平氣ですよ。見る人なんてあまり居ませんから」

「それでも……」

「リリは、こんな感じが合ってるのよ」

גַּעֲמָנִים

「同感」

「え、えと、えと……」

「それでは、解散！」

『おむー！』

「ええー……、あの、」の本を読んでくれてありがとうござ
ました……」

私からも、この本を読んでいただきありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8003z/>

暇な魔王の一日 午後

2011年12月25日18時50分発行